

「一時滞在者」におけるカースン・マッカラーズの意識

黒 田 修

本稿では“The Sojourner”を取り上げる。作者 Carson McCullers が何に目をとめ、どのような世界をどのように写しだしているか、この作品に現われる作家の意識を汲み上げ、そして、そこに何が認められるかを探してみたい。

*

筋は簡単である。国際的な通信記者をしている Ferris (John Ferris) という男が、一週間前ジョージア州の郷里で行なわれた父親の葬儀のために帰っていたが、明日またパリに戻るのにニューヨークに出てきていて、八年前に離婚した先妻 Elizabeth (Elizabeth Bailey) とその新たな家族を偶然のきっかけから訪ね、翌日パリの住居に帰るというものである。僅かこれだけのことであるが、それをどのように肉付けし生命あるものにしていくか。

Elizabeth とその家族を訪ねた翌日、いつものように大西洋を横断する空の旅の後、真夜中のパリ、タクシーで家路を辿る途中、Ferris は今までにない体験をする。

As always after a transocean flight the change of continents was too sudden. New York at morning, this midnight Paris. Ferris glimpsed the disorder of his life: the succession of cities, of transitory loves; and time, the sinister glissando of the years, time always. (131-32)

これは、終節への導入部分の一節である。「都会から都会への移動の連続で、愛といってもただただゆきずりで東の間のものでしかなかった。それに、時はなぜか意地悪で、歳月が早滑りしてしまうばかりだった。」このこと、‘the disorder of his life’を、つまり、自分のこれまでの生涯を如何にでたらめに過ごしてきたか、これをちらっとでも見てしまったのである。その途端、彼の反応はタクシーの運転手に向かう。“Vite! Vite!” he called in terror. ‘Dépêchez-vous.’” (132) 「急いでくれ」というその時、Ferris の心には非常な恐怖が生じている。大西洋を横断するのはいつもと同じなのだが、なぜか今回はいつもは見ないことを一瞥することになる。そして、この一瞥が、Ferris を、仮そめながら、いま家族と呼べる者たちの待つ筈の家へと大急ぎで駆けさせている。

Again, the terror, the acknowledgement of wasted years and death. Valentin, responsive and confident, still nestled in his arms. His cheek touched the soft cheek and felt the brush of the delicate eyelashes. With inner desperation he pressed the child close—as though an emotion as protean as his love could dominate the pulse of time. (133)

作者はこの作品をこのように締めくくる。ここには極度の恐怖感が再び示されていることが分かる。この再度の'terror'を引き起こす直接のきっかけに、"Monsieur Jean," Valentin said. "The guignol is now closed." (132) という一文をこの終節の直前にもってきている。そしてその一文を引き出すための前置きとして、さらにその前に、"Ferris spoke with rapid urgency: 'We will go often to the Tuileries. Ride the pony and we will go into the guignol. We will see the puppet show and never be in a hurry any more.'" (132) という一節をもってきている。このように Ferris が自らに言い聞かせながらつぶやくのに答えて、Valentin という子供の言う、この「あやつり人形の見せ物、もう閉まっちゃたよ。」というせりふには重要な意味をもたせているが、そのことについては後で考えることにする。とにかく Ferris はこの言葉に震え上がる。その驚愕は、しかし、同時に、Ferris が「無駄に過ごしてしまった歳月と死の何たるかを思い知った」からこそ生じたものだとしている。先にはちらっと見た程度ということで'glimpsed'を、それがここでは'acknowledgement'という語を用いて、時間の推移と共に'terror'の鮮烈度が変わったことを示している。その恐ろしさの正体が、一瞥の把握から明瞭な認識にまで至っているのである。そして、その現実の感覚を、さらに、実際の感触や感じを表わす言葉を用いて生々しく盛り上げ、今まで形ばかりの家族の一員であった七歳になる男の子 Valentin を、実の息子ではないが、心の内ではもう必死になって、時の息の根を止めるかと思うほど強く抱きしめるところで終えている。しかも、'an emotion as protean as his love' とあるように、彼 Ferris の今の愛情ほども変幻自在の感情を爆発的にほとばしらせたまま、この作品を結んでいるのである。

さすがに終節だけあって、この部分には作品に注ぎ込んだ作家の意識が収斂している。そのため、作家の関心を理解する鍵となる語句と、そのつながりを示す作家の認識が凝縮した宝庫となっている。その一つ、'wasted years and death' は、特に、この作品の発想の根幹として意識されている。これを見たことが Ferris の場合'terror'となり、最後の'emotion'の爆発につながるとしている。そして、感触や感じといった切実な実感が、Valentin という子供が、さらに、Ferris が Valentin を激しくかき抱くということが、それぞれこの作家によって強く意識されている。それでは、具体的にどうして Ferris の場合そうなるとしているのか、その辺りを見る。

Valentin は真夜中にもかかわらず、独りぼっちで自分の母親 Jeannine が、歌手として

歌っている勤め先のナイトクラブから帰ってくるのを、さらにもう一時間、床にしゃがみ込んで絵を描きながら待っている。そこへ Ferris が帰り着くのであるが、ドアを開けてくれたのがこの Valentin である。Ferris は、この男の子が描いていたバンジョー弾きの絵を見て、“We will go again to the Tuileries.” (132) と言う。「チュイルリー宮殿遊園地にはまた行こうね」というこの響き、そこには Ferris の実に切ない思いが電撃的に走って流れるのが感じられる。「チュイルリー」こそ彼の中では、うかつにもというか、気づくことすらなくというか、とにかく滑り落とさせてしまっていた取り返しのつかない過去の時であり、そのことに気がついた今は、今度こそ何としてでも Valentin をともなって埋め合わせ取り戻さなければならない「時」の象徴そのものだと分かる運びになっている。

Valentin については、“It was the young son of Jeannine—a boy of seven with a shadowed little face and nobbly knees whom Ferris avoided and usually forgot.” (128) という説明箇所がある。Ferris は Valentin のことを、ただただほったらかしにしているだけというわけではない、それどころか、避けてふだんは忘れてしまっている、それほどあしらいをしていたのである。もっとも、Valentin は Jeannine の子供であって、Ferris にとっては実の子ではないし、Jeannine についても、“But at first, after the divorce, the loss had almost destroyed him. Then, after the anodyne of time, he had loved again, and then again. Jeannine, she was now.” (123) という箇所から、Elizabeth との離婚の痛手が癒えた後、恋をし、また恋をし、その相手がたまたま今は Jeannine であるだけというような説明からも分かるように、やはり「束の間の」ものであるという性格が示されている。ところが、みずから訪れていった先の Elizabeth に向かって、話の弾みとはいえ、この Jeannine とは近々結婚することになっているなどと嘘をつく羽目になり、その嘘を本当のことで埋め合わせしようとするつもりが、“Jeannine has a little boy of six. A curious trilingual little fellow. We go to the Tuileries sometimes.” (130) とまたしても、思わず嘘をついてしまう結果となっている。結婚をする約束など互いに交わしていないし、だいいち、Jeannine は今は Valentin と Ferris の三人で暮らしているとはいっても、同じなりに五年間別居したままの夫のいる身だし、Ferris が Valentin をチュイルリーに連れていったのはたったの一回きりしかないわけであるのに、なぜ Elizabeth の前でそのような嘘になることを計らずも言わねばならなくなってしまったとしているか。(ちなみに、Valentin の年令を Ferris が言うこの箇所では、七歳ではなくて、六歳にしているところなどは、作品の隅々にまで行き届いている、心憎いほどの作者の緻密な組立が感じられる。それも、前もって事実関係を示す説明箇所では七歳としておきながら、Ferris が言う箇所ではわざわざ Jeannine に出会った時の Valentin の年令のままの六歳とすることで、読者に、彼が Valentin のことをいかに

なおざりにして忘れてしまっているかをさりげなく示す、そのあたりこそ、この作家のちょっとした技功の所である。) Ferris が、言えば嘘になってしまうような、思わぬことを口走らねばならなくなる、そのわけを作者は何と説明しているか。

それは、彼を招いてくれた Elizabeth とその家族、Bailey 家の人たちの、彼に対する圧倒的なボリュームの心的急迫であるとする。その一端を次のように表現している。

Elizabeth was very beautiful, more beautiful perhaps than he had ever realized. Her straight clean hair was shining. Her face was softer, glowing and serene. It was a madonna loveliness, dependent on the family ambience. (126)

ここには、以前よりもっと柔和で、穏やかで、生き生きと輝いて、聖母マリア然とした美しさを放つ Elizabeth が、侵しがたく、付け入る隙間もないさまに描かれている。しかも、そのことは彼女に限らず、家族の誰もが家庭の中にそれぞれの位置を占めて解け合う一家団欒の様子が、侵しがたい雰囲気として他の箇所にもそれとなく表わされている。Ferris にとって衝撃となったのは、実は、この家族がかもしだす 'the family ambience' というものであることが分かる。この「家族の雰囲気」というのが、Elizabeth の存在そのものから、その現在の夫から、そしてその子供からあふれるように出て Ferris を照らし圧倒する。ここにみる Elizabeth は、そのような雰囲気を光背に、妻として、また、母として、今や揺るぎない家庭というものを築いている。そこに彼の入り込める余地は全くない。

このことこそが、Ferris を Jeannine と Valentin のいる家へと駆けさせることになった原因であり、Ferris が垣間見ることになる一瞥が生じた理由だと作者が説明しているところのことである。それでは一体 Ferris に何が生じたというのか。

Ferris felt himself suddenly a spectator—an interloper among these Baileys. Why had he come? He suffered. His own life seemed so solitary, a fragile column supporting nothing amidst the wreckage of the years. He felt he could not bear much longer to stay in the family room. (126)

この一節中に、「これまでの歳月が残骸となっているその真っ只中で何も支えずに立つ、もろくなった円柱然として、自分自身の生涯がかくも孤立無援であるように思えた」とあるが、この Ferris の心象こそこの作品が放つ最も強烈な光彩の源である (もちろん、イメージの細部はいろいろに思い描かれる余地はあるから、読者の好みによる個人差は当然ありうる。何も支えず壊れやすくなっているにしても、美しいとさえ感じさせる趣きのある、例えば、ギリシャ神殿か何かのような柱を思い起こすこともあるかもしれない。そうなれば、その美しさがゆえに、何やら余計に印象の度合いが増すかも知れない。が、ともかく核となる印象そのものに差が生じることはない)。何かを支えて立っているつもりだったのが、気がついてみると何も支えてなどいない、それどころか、これまで

費やしてきた歳月が水の泡と化し、周囲にあるのはただただ残骸ばかり。愕然となっている様が見えてくる。この孤立感、この孤独感、この寂寥感が、読者の印象を支配する。しかも、後のちまで読者の心を捉えて離さない程、強烈に印象づける力を有する性格のものである。

Ferris が心象としてこのような絵図を見ることになったのは、「Bailey 家の人々に囲まれながら、突然、自分が見物人、いや侵入者であるかのごとく感じた」からだ、この同じ一節で説明している。また “Was it indeed true that at one time he had called this stranger Elizabeth, Little Butterduck . . .” (127) という別の箇所、Elizabeth から受けるそのような隔たりを、「見知らぬ人」という Ferris の抱く大幅なブレの感覚で表現している。自分の側の存在であるはずだった Elizabeth の、いま目の当たりにしている世界に引き換えこの自分は、もはや何の意味も価値もない残骸の真ん中にぽつんと孤立しているという、寒々とした寂寥感、そして、目の前の現実が、それも過去から繋がってきていたはずの現実が、俄かに過去から切り離され、自分とは遥かに遊離した不案内な世界にすっかり様変わりしてしまっている、しかもなぜかその前に立たねばならないという、極めて居心地の悪い、違和感といったぐらいいは収まらない思いに襲われている様子がよく分かる。それを、「見物人」あるいは「侵入者」になった気がした、という Ferris の抱く奇異な感覚で表現しているのである。

自分の先妻 Elizabeth とその夫 Bill Bailey、そして、Valentin とほぼ同い年の男の子 Billy とまだ幼いその妹、自分を迎え入れてくれている筈のこれらの人たちが、同じ部屋に居ながら突如一変して、何の縁もゆかりもない全く赤の他人と見え、自分が如何に場違いな所に居合わせているかを思い知ったということである。この感覚は、人間の現実をよく突いている。自分の了解しているとおりで信じて疑わない眼前の世界が、いつのまにか、一瞬のうちに全く見知らぬ世界に様変わりしてこちらに迫る。この突如の異質世界への迷い込みの感覚は、自己喪失の危機を感じさせて強烈な激震をもよおさせる。と同時に、八年の歳月を隔てて、先妻の築き上げた目の前の世界に対し、自分のこれまでの年月がいかに残骸に等しいものにしか見えない。自分の中で自分の信奉していた意味を裏切る、意味の崩落が起こっている。つまり、これまでの生き方が、自分自身の中で、根こそぎ否定されてしまう思いに襲われていることを示しているのである。

このように、この円柱の心象には、自分自身が崩れてしまいそうになりながら、しかも孤立無援である様を見て、もうこの場に居ることには耐えられない、いたたまれないという、そういった情動というものが込められていることが指摘できる。そしてそのような情動が、終節の、時の息の根を止めるかと思うほど Valentin を強く抱きしめる、あの爆発的な感情のほとばしりに繋がられているのが分かるのである。

*

しかし、かといって、作者は、Ferris が、自分には支えるべき何もないということを感じ、自ら望んで訪ねてきた場所から早々に引き揚げたい、そして、一刻も早く自分の居ることのできる場へ向かいたいと思うような、そのような焦りの、しかも嫌な気持ちに至らねばならなかったわけは、八年の歳月の間に先妻が築いた家庭というものを目の前にしたからこそだ、とは因果関係を単純に結び付けたりは決してしていない。確かに直接の動機としてはそのように表わしているが、そこに至るまでに密かに潜航するその因があることを読者が踏まえるべきこととして前置きしている。

Ferris が Elizabeth とその家族に会うことになったそもそものきっかけは、ニューヨークで泊まったホテルの隣にあるドラッグストアに彼が朝食を取りに入ったことにある。歩道を見下ろす窓側の席に座っていたのだが、その時、彼の体が急にびくっとなる。ウインドグラス越しに見ると、ちょうど彼のいるそのすぐそばを、ゆっくり通り過ぎたのが Elizabeth である。心臓が激しく小刻みに振動するが、そのあとひきつづいて、何でも向こう見ずにやれる気持ちと、なんだか有り難いという気持ちとが、彼女の通り過ぎたあとも消えずに残っているのだが、彼にはどうしてなのか分からない。そのあとすぐそこを出て彼女を追うが、追いつくことが分かりながら踵を返してホテルに戻る（この部分には、頭と衝動との葛藤が見られる）。戻りはするが、それに、アルコールで静めようとしてみるが、体と心の動揺は収まらない。そこで、自分自身にあれこれ自問自答するいとまを与えず Elizabeth に電話をすると、前々から夫婦で劇場に出かけることになっているので早い目の夕食にならどうぞという招待を得る。

ここで再度指摘しておかなければならないのは、Ferris が意識的よりも、むしろ無意識的に、感情で動いたということである。Elizabeth を見たことで生じた体と心の動揺については、表現をかえて何度か言及している。“His decision to call his ex-wife was impulsive.” (123) —それは抑えの効かない感情、つまり、衝動である、と。何度かの逡巡を繰り返しながらも、結局、彼を彼女のところへ赴かせたのは感情だった、ということについてはいま触れたとおりであるが、理性も、「彼女のところへ行っていけないわけではない」と自己正当化の役割をつとめる側に走ってしまうほど、感情に身も心も支配されてしまっていたということである。ではなぜそういうことになるのか。

びくっとなって、ウインドグラスを隔てたすぐそばを Elizabeth が通り過ぎるのを見るという説明箇所の前に、“As Ferris closed the address book, he suffered a sense of hazard, transience, almost of fear.” (122) という一文を置いて、作者はその理由を暗示的にそれとなく示している。Ferris が襲われる、このような「いつどうなってしまふか分からないという感じ、無常感というか、それはもう、恐れとでもいっていい感覚」というのは、しかし、どこから来るとしているか。朝食のためにに入ったドラッグス

トアで、最初、番号を確かめるために古い住所録を取り出して、そのうち次第に食い入るようにページを繰って、ニューヨークや、ヨーロッパの首都や、郷里の州の、過去に付き合いのあった人々の名前と住所を見ていくうち、彼らの当時とその後の消息を思い浮かべて、ある者はその後どうなっているか不明であったり、ある者は金持ちになっていたり、ある者は療養所に入っていたり、また、ある者はもう既に死んでしまっていたり、それぞれの栄枯盛衰を噛みしめることになったからだとしている。

しかし考えてみれば、住所録を開いて見るにしても、普通なら前途に向けて必要な箇所を調べるだけで済むところだが、過去を振り返った Ferris の場合は、心的にどうしても後ろ向きになって見入らざるをえなかったのだと、読者がその必然的な因果関係に気付くべき前置きがもうけてある。一週間前に郷里で行なわれた父親の葬儀のことが、それである。

The shock of death had made him aware of youth already passed. His hair was receding and the veins in his now naked temples were pulsing and prominent and his body was spare except for an incipient belly bulge. Ferris had loved his father and the bond between them had once been extraordinarily close—but the years had somehow unravelled this filial devotion; the death, expected for a long time, had left him with an unforeseen dismay. (121)

ここで、父親の死については、だいぶ前から予期していたことではあったが、Ferris が不測の狼狽ぶりを見せたという言及があるように、彼が父親のことを如何に大事に思っていたかということと、そのために、その死が彼に及ぼした影響というのは計り知れないほどであったということと、もう一つ、父の死とともに彼が自身の若さの衰えを覚えるに至ったということと、読者があらかじめ踏まえ置くべきことだとしているのが分かる。

Ferris が自分自身忘れていた三十八回目の誕生日を、思いがけず、Elizabeth のところで祝ってもらうことになるという箇所で、彼の年齢がはっきりするわけであるが、それより先、冒頭近く、父親の葬儀について簡単に触れるところで、後退しつつある髪とか、こめかみに浮きだして動悸を打つ血管とか、痩せぎすながら出始めた腹とかで、彼の容姿を露わにしている。そして、父が死んだというその衝撃によって、自分がもう若くないということに気付いたとしている。

"He saw again the outstretched body on the quilted silk within the coffin. The corpse-flesh was bizarrely rouged and the familiar hands lay massive and joined above a spread of funeral roses." (127) これは、Elizabeth のところで、話のいきがかりから、死の棺におさまった父親の有様を Ferris が思い返している箇所であるが、子として非常に献身していた最愛の父が、今は死肉となって、それも本来の色でないもの

を無理にも似せようと「異様にも」紅をさしたりなどして、懐かしい両の手は、まき敷かれたバラの上に重たそうに乗っかっている。紅やバラの人為的なあしらいが、いかにも取り繕いのよそよそしさに感じられ、天地がひっくり返っているこちら側の気持ちとはおよそかけ離れて縁遠い、生前の父とは似ても似つかぬ、そんな感触がよく出ている。これも残骸の一つの絵図である。そして、あの残骸の中の円柱のイメージと結びつくのである。あの心象は Ferris にしてみれば、それを見た時点で、自分の墓碑を目の当たりにしたのと同じようなものであると、読者は受け取ることができる。残骸の中の円柱は、何の意味も無くなった歳月以外支えるものもなく突っ立つと自身感じる Ferris に重なり、それはまた、あたりの全てが崩れ去った中になんとか立っている彼の墓碑とダブる。それはこの時点で、自分の人生に一旦終止符が打たれて、否応なくこれまでの全てを振り返り見てその意味を問うことになった、と見ることができるからである。もう若くはない、壊れやすくなり始めてきた自分だけが一人取り残され、周囲の意味ある大事なものはすべて崩れ去ってすっかり姿を変えてしまっている。

Ferris は、目の当たりにした父親の死骸にも、やはり、いつかくる自分の死をダブらせていると読むことができる。自分ももうそんなに若くはないという衰えの自覚は、その修復の焦りに繋がっていく。なぜなら、そんな場合だれしも、死を前にすれば、たとえ無自覚的であるにしろ、存在の意味を問わないものはいないであろうし、空しければ空しいほど、ほんの僅かでも、なんとか意味を見いだそうとするであろうし、これまでを振り返り、これからの在り方を探ろうとするであろう。存在の意味の追求と充足に当てることのできる残された時間を、否応なく、惜しむようになるであろう。こういう焦りは、頭で考えて出てくるものではなくて、意識的であるよりも、無意識的なもので、むしろ、身体的に感覚として感じられるものである。作者はそのあたりのことをうまく表わしている。

“He had the feeling that something unpleasant was awaiting him—what it was, he did not know.” (121) という説明で、これから先の展開をすでに冒頭で暗示している箇所がある。この「何か嫌なことが待ち受けている気がした」という予感めいた感覚は、Ferris がニューヨークのホテルで目を覚ましたときに受けた感じである。Elizabeth のところで、その家族たちと一緒にいて、見知らぬ人の家庭の団欒に侵入したような場違いな感じにもうこれ以上耐えられない、と Ferris が思う箇所があることは既に指摘したが、読者はそのところで「何か嫌なこと」の予感が的中していることに気付かねばならないことになる。

また、Elizabeth を追いかけるのを一旦思いとどまってホテルに戻り、やはり衝動的に彼女に電話をするまでの間に、“And something—wasn't there something else?” (123) と Ferris が思うというところがある。明朝パリに向けて出発するまで、その日まるまる

一日あるということと、今日のうちにしておくべきことのあれこれを頭の中でおさらいして、「何かまだほかにあるんじゃないか」という気に駆られながらなぜか思い出せないことが、電話する決意に拍車をかけた、としている。さらに、彼女に電話したあと訪問するまでに、やるべき事を次から次へと片付けながら、折に触れて、なおもまだ、“the feeling that something necessary was forgotten” (124) に駆られていた、としているところがある。このように、「何かほかにまだあるのじゃないか」とか、「何か必要なことを忘れていないか」というような気持ちの反復強調があるところから、Ferrisにとって何かなくてはならないものについての言及がこれからまだ後にあると仄めかしていることに読者が気付かねばならないことが分かる。

そして、その答えは終節への導入部の一節に用意されている。

The child looked up and Ferris drew him closer to his knees. The melody, the unfinished music that Elizabeth had played, came to him suddenly. Unsought, the load of memory jettisoned—this time bringing only recognition and sudden joy. (132)

これは、実は、先のところで触れた、Ferrisの「チュイルリ一宮殿遊園地にはまた行こうね」という、あの切ない訴えの直後の部分である。ふだんは避けて忘れていた存在である Valentin を今は膝に抱き寄せる。その時ちょうど、前日、Elizabeth が弾いてくれて、食事を報せるメイドの登場で途中になってしまった、覚えのあるピアノ曲の示唆していたことが、ずっと、思い出せそうで思い出せず気になっていたのが、ここに来て、思い出そうともしないのに、ふいに、過去の記憶がよみがえり、彼女が常に言おうとしていたことがやっと飲み込め、それが ‘recognition and sudden joy’ となって、必要と感じていた何かを満たされる。この「認識と突然の喜び」は、Valentin を膝に抱き寄せたその時のぬくもりと同時に得られたもので、その感触あるいはその感覚こそ Ferris にとって大事なものであることが分かる。「嫌なことがあるのじゃないかという感じ」と「耐えられないと感じた」こととの結び付き、「何か忘れていないかという感じ」と「認識や突然の喜び」との結び付きを示すこれらの例のように、時間的に飛び越えてこれから先に起こることを、前もって身体や感覚に現われる予感とか感じとして、作者は無意識というものをうまく伝えている。

*

作品の表題の ‘sojourner’ とは「一時滞在者」の意であるが、これは “expatriate” (126) すなわち「国外居住者」という語と対応させて用いている。しかも作品中、表題以外で “Sojourner” (126) が出てくるのは一回だけである。もっとも、‘sojourn’ という動詞の過去形でなら、冒頭部分で一回出てくるが、それっきりである。それらの語は、一見互いに関係のないところで用いられているようであるが、実は密接に関連し、作者の意識

の中で重要な位置を占める概念であることが分かる。

‘Sojourner’が用いられるのは、Ferrisの方から急に電話で申し出てきたこととはいえ、Elizabethとしては、彼に会うのは八年ぶりであるのに、前からの計画のため劇場へ出かけなければならないので、招いておきながら追い立てるようにすることを心苦しく思いながら、「そのうち、近いうちに、間違いなく国に居るようになるわね。国外居住者なんかになるつもりなんてないでしょ。」(126)と彼女が言うのに対して、その言い方を嫌う彼が、それならどう言えばいいかと聞かれて答える箇所である。Ferrisが自分のことを「一時滞在者」と呼んでもらいたいというこの時点は、あの円柱の絵図を心象として見た直後のことで、彼にとって国外つまり‘home’の外という響きは、ぐさりと刺さる語感ゆえ、あまりの寂寥を感じさせるそのとげとげしさを直感的に回避して、あちこち飛び歩く職業柄、一時的に国外に滞在しているだけなんだと自らを慰め粉飾する言い方をするわけである。

それに対し、‘sojourner’が用いられるのは、冒頭、Ferrisがニューヨークのホテルで眠りから目を覚ましきるまでのしばらくの間、ぼんやりした、意識がまだ半ば醒めていない‘semi-consciousness’の状態でおそらく、仕事上、これまで行ったことのある諸外国のどこかで、歳月というもののない領域の夢見心地のうちに、今朝はそれがローマの地であるが、そこに一時滞在している気になっているという出だしの一節である。

The twilight border between sleep and waking was a Roman one this morning: splashing fountains and arched, narrow streets, the golden lavish city of blossoms and age-soft stone. Sometimes in this semi-consciousness he sojourner again in Paris, or war German rubble, or Swiss ski-ing and a snow hotel. Sometimes, also, in a fallow Georgia field at hunting dawn. Rome it was this morning in the yearless region of dreams. (121)

この部分は出だしとして印象的であるだけでなく、Ferrisの意識変化というものを主に考えれば、作品全体の中で重要な役割を果たしている。‘Sojourner’という語については、この出だしの‘sojourner’との繋がりによって意味を押し量ることを作者が求めているのが分かる。作中人物Ferrisの意識の上では、「国外居住者」と言われたのに対する反応で、「国外一時滞在者」のつもりが、表題になると、作者の意識の上では、単に、国外に一時滞在しているだけという意味では収まらなくなる。この一節で、Ferrisが夢の領域に遊び、夢見心地の一時滞在を楽しむ様子を伝えながら、「一時滞在する」という語を、「半意識」すなわち「眠りと目覚めの間の薄明の領域」あるいは「夢という歳月のない領域」という語句と共に結び合わせて用いているからである。ここで、作者はFerrisのことを夢の領域に束の間逗留する者として捉え、表題の‘The Sojourner’にこの「夢領域一時滞在者」という意味を込めているのが分かる。

さらに、読者は「夢領域一時滞在者」に二重の意味を見いだすことを要求される。それは単に冒頭部分に限定される「夢領域」という文字どおりの意味にとどまらず、Ferrisのこれまでの生そのものが「夢領域」にあったということである。なぜなら、彼がこれまでの歳月が瓦礫同然となっているのに気付く、あるいは、夫婦生活を共にした筈のElizabethが見知らぬ人として写るというくだりで、辺りが一変しているのを見るという、夢から醒めたと同じ覚醒体験を示しているからである。構築されたこの作品の構図を見れば、このことが作者によって裏打ちされていることがよりはっきりする。‘waking’は醒めている時の顕在意識のことであり、意識の表面化している領域ということで仮に一番上の層にもってくるとすると、その下に、夢の領域にあたる‘semi-consciousness’の層がきて、さらにその下の層に、‘sleep’つまり、意識のない状態として半意識にもならない無意識の領域がくることになる。このことをまず冒頭で断ることで、意識の醒めている方から順に、‘waking’ ‘semi-consciousness’ ‘sleep’という三層構造を作品全体の下敷きとして据え、本来、「眠り」の領域に位置する死を父親の死としてFerrisの目の前に現実化させる。

そして時間軸に沿って、自分の若さの衰えの知覚、嫌な予感、古い住所録、Elizabethが通り過ぎるのを見る、何か他に必要なことがあるのではという気がかりの反復、ドアを開けてくれたのがElizabethではなくその子のBillyで予期せぬことであったために驚かされる、居間に通されてElizabethの現在の夫Bill Baileyに会うが彼のことを「感情的には認知していなかった」(124)のためにさらに驚かされる、家族の雰囲気や光背にElizabethが聖母マリア然として輝いて見える、自分が闖入者であり自分の生涯が瓦礫となった年月の中に何も支えず立つ崩れやすくなった円柱であると感じる、父親の話が出て死体となった棺に納まっている様子が再度思い浮かぶ、Elizabethの弾いてくれるピアノ曲が荒涼とした記憶のあれこれを蘇らせるのに反してその曲自体は実に澄み切って清明に響く、彼女のピアノの最後の馴染みある曲が食事を報せるメイドのために途中になる、パリに戻ってValentinを膝に抱き寄せた時あの途中になったピアノ曲が以前から示唆し続けてきたことの何であるかが認識でき突如喜びが湧く、Valentinが「あやつり人形の見せ物、もう閉まっちゃったよ」というのを聞いて無駄になった歳月と死の何たるかを再度思い知り恐怖のうちにValentinを必死で抱きしめる、という布置の仕方をしているのである。

時間軸に沿った布置のうち、ただ一箇所だけ、十分あり得るにしても出来すぎた偶然としか取られかねない出来事がある。それは先に見たところであるが、恐れや不安に近い無常感というものを、Elizabethが通り過ぎるのを見るということの直前のキューとして置いている箇所である。古い住所録を繰って生じる無常感にしても、古い住所録がただちに無常感に繋がるわけではない。ましてや、古い住所録を繰って生じる無常感が

ために Elizabeth が通り過ぎるのを見る、ということには決してならない。そのような恐れに近い感覚は Elizabeth を追いかける理由にはなる、が、Elizabeth がそばを通り過ぎるのを見る理由にはならない。だから、読者の側は、Ferris がそのような感覚に襲われることと彼女が通り過ぎるのを見ることとの繋がりは、まったくの偶然としか取れない。もっとも、ドラッグストアに入ったのも、歩道の見下ろせる窓のすぐそばの席に座ったのも、たまたま朝食をとろうとしてのことだし、古い住所録を見入るようになるのも、たまたま番号を調べようとしてのことであるわけだから、確かに表面的には、偶然という要素を前面に出しているようではある。が、そののところをまさに必然の繋がりとし、結び付けている作者の意識が汲み取れるのである。それは、感覚的に心的土壌を準備する、恐れに近い無常感と、心臓の震え、そして何でも出来るとか有り難いとかという気分とがほぼ同時に生起し符合することではじめて、猛烈な行動となる衝動を駆り立て、この箇所こそ、作品上展開を与える分岐点として極めて重要なところだからである。

目が覚めた時に感じた嫌な予感も、折に触れて駆り立てとなる何か忘れていたのではないかという感じも、恐れを感じたと同時にびくっとなって Elizabeth を見るという結び付きも、どれも Ferris 本人が頭で考えたものではない。それは、無意識レベルの感覚であり、共に出所は同じ、父親の死である。時間を隔ててのちに実現する事柄を、事前に感覚的にあるいは直感的に察知するというようなことと同様に、併起しながら一見無関係に見えるものどうしの間での呼応というものが見られるが、それをも無意識の層で繋がる情動の流れとして見ていることが分かる。作者はこのことを、共時的アレンジメント、すなわち、因果関係を飛び越えて意味が共鳴する共時的な布置として捉え、意識しているのである。しかも、読者には、一連の出来事のどれをも、偶然としてより、むしろアレンジメントとして意味の方に比重をかけて汲み取ってくれることを期待している。嫌な予感、内的なかき立て、古い住所録、Elizabeth との偶然の出会い、途中になってしまったピアノ曲、ほぼ同い年の二人の男の子、これらすべては、父親の死を契機に、Ferris の中で知覚される一つの意味に向かって連動し生起するのだ、と。例えば、Ferris の感じた嫌な予感は、Elizabeth のところでの、見知らぬ人の家庭の団欒に侵入したような場違いな感じに耐えられなくなるという具体的な事実と結びついた。これは確かに偶然である。しかし、もし無意識の方がアレンジしたとすると、Elizabeth がドラッグストアのところを通ることも、そして嫌な思いをすることも、何もかも当然最初から生起すべきことであったということになる。このように言うと、運命決定論になってしまうが、少なくとも、理屈で説明できない、感覚、感じ、身体の反射的の反応や衝動の部分、つまり、情動的な現象については、無意識のアレンジが働いたと考えることはできるし、そのようなことは、むしろ、大いに有りうることである。

Ferris に与えられた条件として、最愛の父の死に直面し、三十八歳という年齢から自

分の若さの衰えを知覚するということになれば、死の共時的アレンジメントとして、すべてが結びついてきても不思議はない。連動する一連の駆り立ても、すべて気付かぬながら無意識の層で、後ろ向きの情動を自ら働かせる当然の循環となる。つまり「過去という時」で情動の流れが繋がっているからである。自分自身の一部をもぎ取られた、その痛みを痛切に感じるところから癒しを求める。無自覚ながら壊れものの寄る辺なさを感じ、より安定した拠り所となる懐を探す。過去に向かうのもそのためである。少なくとも、これまで確かな実感をもたらしてくれた記憶の方向に知らずのうちに逃げようとしてしまうのである。

しかし、父親の死が及ぼした衝撃は無意識までも揺るがした結果、平衡を保とうとする部分が、あるいはまた、自己を完成させようとする叡知につらなる無意識の育成的な部分が Ferris のこれまでの生き方について覚醒を促し、その意味を問わせるために、Elizabeth を見せ、当初嫌な思いをしても、それを経ることによって気がつくように、いろいろ考える暇も与えず会いに行かせた、とそう考えることはできる。それはもちろん、意味が分からないまま直感的に結びつく衝動ではあるが。そして、そのあたりのことを作者が意識していると分かるのは、やはり、何か忘れていないかという感じに対して用意する答えが、「認識」や「思い知り」の意を表わす "recognition" (132) とか "acknowledgement" (133) というものだからである。

「認識を得る」とか、「思い知る」という内的覚醒が生じるまでは、Ferris の覚めて起きている筈の 'waking' の層も、そのすぐ下の半意識層のものである夢のつづきとなっていて決して覚め切ってはいなかったとしていることが汲み取れる。つまりところ、Ferris は覚醒するまで、歳月というものがない自分だけの夢の世界に生きていたことになる。もっとも、Ferris にとっては父親の死に直面したその時すでに意識の三層とも揺さぶられる内的な激震を覚えているのではあるが、目を覚ましてから起きるまでの間にはまだ朦朧としている時間があるように、当座、その揺さぶりがあまりに大きすぎて面食らいその意味するところが理解できないでいる。死をどう受けとめていいかわからないという段階では、その間絶えず、死そのものとは一見関係がないように見えながら、しかも生起する互いどうし何の繋がりもないように見えながら、連動する一連の駆り立てというものが幾重にも生じてくる。無意識という混沌とした層で震憾する情動が、意識化されて整理がつくまでに暇がかかるということを的確に示している。

*

Ferris に一度連れていってもらったチュイレリー宮殿遊園地で、Valentin はあやつり人形の見せ物を見たがった。Ferris は、しかし、仕事で時間がない、またこの次にしようと言ったまま約束を果たしていなかった。それが、Elizabeth の息子 Billy の、あふれる家族愛に包まれた様子を見ることで、反射的に Ferris は、Billy とは対照的な影のある

血色の悪い、家庭的な愛情に恵まれない Valentin のことに気付く。仕事に於てと同じように、愛に於ても束の間一時滞在するその延長で結婚にも破綻し、遂に父親の死に迫られて自分のこれまでの世界が孤立し崩壊しかかっているのを痛感する、そのような Ferris は、Valentin の上に自分自身を重ね合わせて見て、果たしていなかった約束を果たそうと、Valentin を抱き寄せる。同時に、何らかの意味を認識し喜びを感じる。そして、これからはもう生き急いだりして「時」に意地悪な早滑りは絶対にさせない、と固く心に思う。しかし、「あやつり人形の見せ物、もう閉まっちゃったよ」と聞いて、生きて動く生命そのものの象徴が演じられる幕の閉じられるように感じ、再び恐れおののき、自分の上に何かを支えるということもなただけ崩れさせるためだけの無駄な歳月と死の何たるかを明視するや、顧みなかった子供を、愛情のありったけを込めて抱きしめる。この瞬間、結果に於て、注いでいなかった愛情を注ぐという、「意味」を一種成就している。しかし、ふだん避けられ忘れられ、今は母を待つ Valentin の、Ferris が抱き寄せるままになっている様子は、思うに、切なく哀しい。破綻して脅えたものどうしが、ぬくもりを求めて互いにしがみつような光景である。ここには、人間の拠り所のなさから来る孤立感を埋め損ねた者の哀感が滲み出る。

作者は、このように、愛情の面に於てゆがめられた歪な人間をよく登場させる。特にそれは子供になって現われる。思えば、中年とはいえ、現実に取りながら自分だけの夢の世界にいた Ferris も、死を認識することのない大抵の子供とちょうど同じことであった。それは Billy が憧れとして Ferris のような職業に就きたいと思うように、一見世界を股にかけて華々しく見える世界であるが、実体は、夢の中をあちらこちらと彷徨い歩く、ちょうど子供が大人になったらこうしようああしようと思ひ描く、そういう夢を現実に生きてしまい、夢の外つまり現実とは交流しているつもりで実際には出来ていなかった。このような愚かしいとも言える人間の悲哀の一面を描きながら、何となく笑うに笑えない、自分を見せられているような、滑稽で、それでいて、哀しい、そんなペーソスを漂わせている。そして、そのようなペーソスが読者の情動を震わす鮮明な心象となるべく、後で妙に気になる一幅の絵図をこの作品でも一つ用いている。作者はまた、絵画性とともにも音楽性をも意識している。古い住所録とともに、Elizabeth が弾くピアノ曲の「人間存在のいつどうなるか分からない即興性」(129) を伝えるメッセージは、作品を通して読者の心を震わせる律動として構成しているのである。

考えてみれば、この地上も死という現実からすると夢のようなもの。地上にいるということは夢の中にいるようなもので、それもほんの一時のことにすぎない。人間は全て地上に一時いる「夢領域滞在者」。Ferris と同じである。表題の「一時滞在者」には、この意味もダブって見えてくる。夢の領域にまどろむ人間を不意に死が現実化して迫る。夢は一瞬のうちにはじけそうになる。必死になって夢を奪われまいとするが、所詮、死

は圧倒的な現実である。最後には必ず夢は泡沫のごとく消え去るものという諦観を強いる。人間にとって超克できない最大課題となる死が、これでもかこれでもかと意識に急迫して死に対応する何らかの意味を認識することを促す、そのような死そのもののもつ機能を作者は見ている。死は人間に、死の代価を要求する。人間の側では死と等価の意味を模索することを余儀なくされる。その際、死を突きつけられる意識に孤立性の覚醒が起こる。これが孤独感、寂寥感となる。作品ではそのような情動を満たすために、爆発的な愛のほとばしりを構築している。そして、この意識の孤立性の覚醒ゆえに、作者は、愛を死の等価として対置し、死の代価としての愛に、死に対応する意味を求めているのが認められるのである。もっとも、果たしてそれが死を超克することに繋がるかどうかは見通せない。しかし、それは人のぬくもりの交流ではある。

ただひとつ、Ferrisに見られるところで、「自分には支えるべきものがない、全てが無駄であった」として死を前に恐怖するのは、「死の先はない、死をもっておしまい」という認識に立つことを示すものであるが、これは人間普遍の、死に対する認識の一つである。しかし、そこから立つものを、そして、結果的にいかにも愚かしく見えるものであっても、そうしか思えない、そうすることしか出来ない、というそのような切なさに思いを寄せる作者の構築には言い知れぬ哀感が滲み出る。それは、大抵の人間がそうであるわけだが、そのようにしか思えない、そのような生き方しかできない、あるいは、そうしかできなかったというものに対して、理屈を抜いてのゆるしを与えているからである。そこにこの作家の優しいまなざし、そして、その姿勢が現われて見えるのである。

注

テキストは Carson McCullers, *The Ballad of the Sad Café* (Penguin Books, 1987) を使用した。本文中の引用のページ数はすべて同テキストによる。